

# カタカナ語「ケア」及び「介護」の語誌的研究

—1880年から2000年まで『朝日新聞』に基づいての概観—

陳 暁 静

## 1. はじめに

日本語は「和語」「漢語」「外来語」の3つの語種に分けられ、これらが複合した「混種語」を立てることもある。本稿でいう「カタカナ」語は外国から輸入された語が日本語化して、「外来語」となったものを指す。今日、このカタカナ語は日本語の中で様々な役割を担い、外国の事物を表したり、オノマトペに用いられたりする。また、漢語・和語と類義関係を作ることも多く、そのニュアンスの相違が日本語学習者にとって難問の一つである。

こういったカタカナ語は近年のグローバル化により、医学の専門用語、IT用語、コンピュータに関する専門用語などで顕著に増加している。この中に、「ケア」と「介護」のような意味が類似している語も存在している。筆者はこうした語を「ペア語」と呼び、今までに「チャンス」と「機会」といったペア語を「意味フレーム」の観点から考察してきた。このペア語の選択の方法は、2006年に国立国語研究所が公開した『現代雑誌200万字言語調査語彙表』<sup>1)</sup>で、カタカナ語で出現頻度が高く、日常語として重要なものであり、また、先行研究（彭飛2003を参照）に認められたペア語を筆者が辞書などを参照し、最も意味的に近いものを選んで考察対象としている。今回考察対象とする「ケア」は「介護」の他に「世話」「介抱」「お手入れ」などのような類義語もあるが、本稿は辞書、先行研究を参照した結果、現在において意味上最も近いと思われる「ケア」と「介護」を取り上げる。

その前に意味フレームの観点から両語の今日的な意味を探ってきた。それを図1で必要最小限の形で示しておく。「ケア」は治療の補助的な、繊細な面と心理・精神の面（内面）で使われている。その対象者は高齢者、患者とそれ以外人々（学生、選手）であるのに対して、「介護」は制度や学術面でよく使用され、主として高齢者や患者の生活サポート（外側）で用いられている。以上は今日の共時面から得られた「ケア」「介護」の「意味フレーム」である。この「意味フレーム」が形成されるまでどのようなプロセスを経てきたかが今回の課題である。

調査語	語種			制度	学術	サポート			対象者			実施する側 疲れ・重さ
	カタカナ語	和語	漢語			外側	内側・繊細	心理・精神	高齢者	病人	それ以外	
ケア	○	○	○	×	△	△	○	○	○	○	○	×
介護	△	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	○

共起する → ○      共起するが少ない → △      共起しない → ×

中心 ←————→ 周辺

図1 「ケア」「介護」の意味フレーム（陳2013）

本稿は以上を踏まえ、通時面から「ケア」と「介護」の意味変化を考察する。

この「意味フレーム」というのはある語と結びついた背景的世界知識のことである。いわゆる語の意味は一般に何らかの経験、認識、習慣を背景として理解されるものであるとされ、「話者は関連する様々な知識を前提として語を使い、聴者はその背景知識を喚起することによって理解する」と松本（2003：63）が述べている。即ち、語の意味の理解には、辞書の字義的意味だけではなく、使用する人々の経験、知識、習慣に支えられた背景面も考える必要がある。本稿はこういった理論で「ケア」がどのようなプロセスを経て今日の意味まで変化してきたのかを考察する。

そうすると、両語は、図1にまとめたような今日の模様は長い時間を経て成ったものと考えられる。本稿はその変化を早い時期にも遡れる『朝日新聞』<sup>2)</sup>の用例によって明らかにしようとするものである。

さて、新聞を参考資料として用いる理由は、まず、新聞は書き言葉の基準に従い、大勢の人々に読まれるものであり、規範的な語の使い方が見られる。関根健一（2012：168）は、新聞の言葉は一定の規範に基づき、管理され、使用されているものであり、不特定多数の読者を持つ媒体としては、用字・用語について「世間より数歩下がった」保守的・伝統的な立場を取っているから、新語・新用法の使用についても抑制的に対処していると述べている。即ち、新聞の言葉は、世間一般に認識されやすく、その時代の報道に合わせ、慎重に選ばれた語であり、当時の語の使用状況が忠実に反映されていると考えられる。そのため、語の史的な変化を考察するのに適切な資料であると思われる。『朝日新聞』はほぼ1879年以降の大量データが得られる利点がある。

## 2. 先行研究

「カタカナ」語がどのようなプロセスを経て、今日の意味が成り立ってきたについては、金愛蘭（2006）の「トラブル」と「ケース」を一考察があり、「トラブル」は「ヒトとヒトの出来事」から徐々に「ヒトとモノの出来事」「モノとモノの出来事」の面へ拡張してきた現象があると述べている。こういった現象を金氏は「基本語化」と言っている。基本語化とは「一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられる「基本語彙」へ進出するプロセスということである」。

「ケア」も基本語化したものであり、以上のような「カタカナ語が基本語化に至る立場、見方」を参考にし、「ケア」の使用頻度から語彙的な変遷を考察し、合わせて「ケア」の類義語である「介護」についてもその変化を検討したい。

## 3. 研究方法

本稿は、『朝日新聞』1879年～2000年までの全分野欄（政治、文化、社説、経済など）から用例を集め、「ケア」の使用頻度、使用例を年代別に抽出し、その「共起語」に注目し「ケア」および「介護」の今日に至る意味を検討する。ここで「共起語」というのは、文脈の中で考察する調査対象語（以下、調査語）の意味と深く関わりがある語を指す。それによって調査語の意味フレームが明確になると考える。例えば、「事故の後は被害者たちの心のケアも重要である」という文は、「心」が「ケ

ア」の共起語であると見做す。「介護」についても同様である。また、共起語を年代別にわけて『分類語彙表』<sup>3)</sup>にかけ、使用意味範囲の変化を明らかにする。これにより、両語はどの意味分布の範囲で変化が起こってきたのを明らかにすることができる。

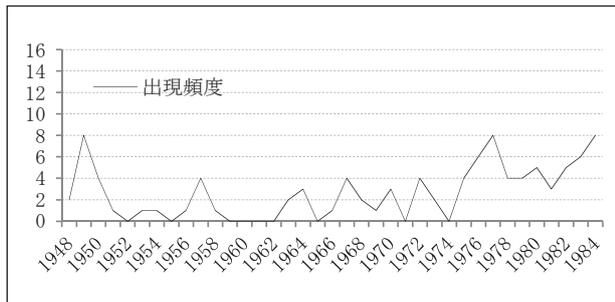
#### 4. 『朝日新聞』における「ケア」の史的变化

この節では、まず「ケア」「介護」の全体の量の変化を確かめ、その後、各語の意味変化を考察する。グラフ1、2は「ケア」の出現状況、グラフ3、4は「介護」の出現状況である。資料の新聞データベースは初期は短縮版、1984年8月以降は完全版となっており、出現頻度が大きく違うため、別のグラフとした。それぞれ短縮版と完全版のグラフの目盛は異なっている。

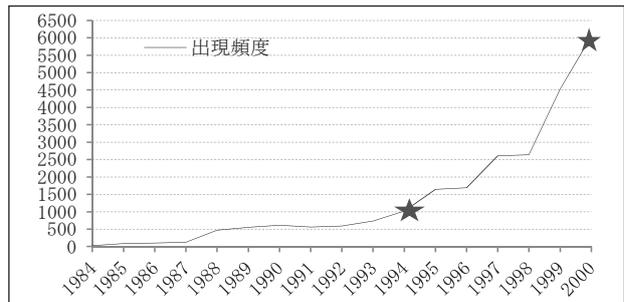
##### 4.1 「ケア」と「介護」の量的な変化について

グラフ1は「ケア」の初出例1948年から示している。このグラフから、初期の「ケア」は1949年だけ使用頻度が高く、その後、1974年以降からやや順調に増えている様子が見られる。1949年の使用頻度が高い理由は「ケア物質」という会社名が頻出しているためである。グラフ2では、1987年頃から高頻度となり、近年に至っている。

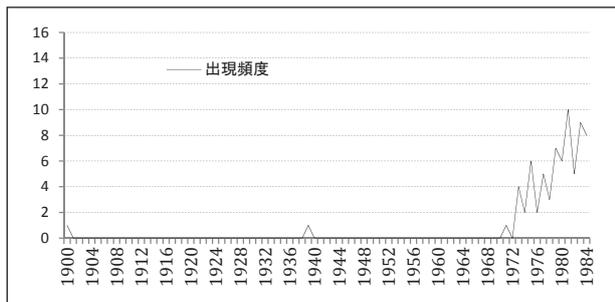
一方、「介護」はこの検索キーで「介抱」も僅かな例が現れた<sup>4)</sup>。本稿は「介護」の変遷を主とするため、「介抱」の例を省いた。そうすると、「介護」の初出例は1900年に、その次に1939年に現れ、一語ずつあるが、グラフ3で見られるように、「介護」は1940年から1970まで使用例がなく、1973年から徐々に増えている。グラフ4も「介護」の使用頻度が増加しつつある傾向が確認できる。



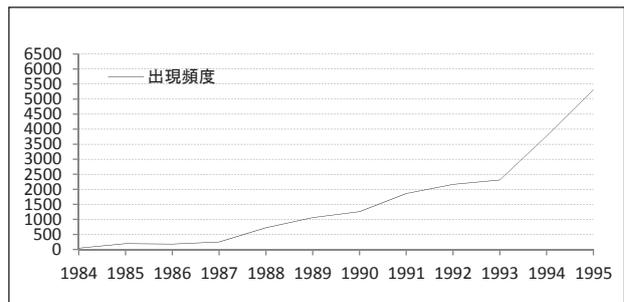
グラフ1 1984年まで「ケア」の出現状況 (短縮版)



グラフ2 1984年から「ケア」の出現状況 (完全版)



グラフ3 1984年まで「介護」の出現状況 (短縮版)



グラフ4 1984年から「介護」の出現状況 (完全版)

\* 縦軸は語数、横軸は年次を示す

以上をまとめると、両語とも 70 年代後半から用例が増加している。この理由を先に言うと、恐らく日本が 1970 年代から高齢化社会がはじまり、それに関する報道、宣伝などが多くなったからだと思う。

#### 4.2 「ケア」の意味とその変遷について

ここでは、前節の量的変化に続いて、意味的变化をたどってみる。

結論を先に言えば、「ケア」の意味は〈具象物を用意したサポート用品の名称〉が初出例であり、次第に〈病後の世話〉や〈一般的なサポート〉や〈出来事後の処理〉などの意味にまで広まり、現在の意味フレーム（p.18 のはじめの図 1 を指す）まで変化してきた。以下の分析によりここに至る経緯を辿る。

詳しく見てみよう。まず、下記の例（1）が 1948 年の初出例である<sup>5)</sup>。ここの「ケア小包み」は日本に居る外国人用の日常生活のサポート用品を指してそう呼ばれている。この「ケア」は恐らく外国語を借用し、カタカナで表記しただけのものと推測される。

- (1) このケア小包みはミソ、シヨウユ、米、チョコレート、砂糖、セッケンなど十九個物品を入れた日本内の日用品である。 (1948/9/30 東京 / 朝刊 p.2)

次に、例（2）はその 5 年後に現れてきた。この「ケア」は〈病後のサポート〉の意味で用いられている。本文は、鉤括弧の（世話）という注釈で意味を明確にしており、意味を補足する必要のレベルと思われる書き方である。したがって、当時「ケア」がまだ日本語として十分に定着していなかったことが考えられる。

- (2) 結核の対策について、やらなければならぬことは限りなくあるが、とかく、おろそかにされているのは、アフター・ケア（病後の世話）ではないかと思う。 (1953/11/18 東京 / 朝刊 p.3)

調査ではこうした、「ケア」にカッコ付きで日本語を備えるような示し方が 2000 年代までしばしば見られた。特に専門用語についてはそのような使い方が近年にも見られる。例としては『「ケアプラン」(介護サービス計画)』のような表示である。

続いて用いられたのが下記の例（3）である。「ケア」は病後のサポートではなく、計画後の自己評価の意味で用いられている。翌年例の（4）は対象がテストなどであるが、出来事のフォローという意味合いは同じである。

- (3) ……このほど数勝分科会で国民所得倍増計画のアフターケア（跡始末）総合報告書をまとめたので、十二月六日の総合部会（中山伊知郎部会長）で説明したうえ、…… (1963/11/27 東京 / 夕刊 p.1)

- (4) しかし研修ブームや「指導力向上」のかけごえにかくれて、テストの結果を教育環境の整備に利用する、という面のアフタケアがなおざりになっている、と批判は愛媛県だけでなく各地にあった。 (1964/6/19 東京 / 夕刊 p.6)

同年には例（5）「カネボウスキンケア」のような美容関係で肌のサポートにも使われている。恐らく日本の経済の発展に伴い、美的関係にも人々が注目するようになってきたため、販売側が消費者の目を引くこうと、カタカナ語で商品名のシリーズとして使用したと推測される。

- (5) お肌にみずみずしさをとりもどす カネボウスキンケアーシリーズ (1964/9/19 東京 / 朝刊 p.10)

その次は 1968 年例（6）であり、やはり「アフタケア」であるが、出版後の文化講演会を指し、出

来事に対する後の処理という以前と異なる意味を持つ。

- (6) このところ大手出版社による文化講演会が盛んだが、こうしたアフタケアまでした例は珍しい。  
(1968/12/26 東京 / 夕刊 p.7)

また、例 (7) のようなイタリアで使われている「指示マーク」を日本政府が日常生活に導入しようとしている。その「指示マーク」が「ケアマーク」と呼ばれている。この「ケアマーク」はイタリアで提唱され、外国語的な用法であるため、カタカナ語で表示されていると思われる。そうした「マーク」は政府が国民に暮らしやすい環境を造るため、サポートするのに借用し、当時、このような使い方は日本語としてまた馴染みがないので、先の例のように括弧の「指示マーク」を添えた表示法がとられている。

- (7) そこで、ケアマーク (伊扱い指示マーク) を世界共通にしようという動きが進んで、国連の国際標準化機構 (ISO) では、もう十年も前から統一案をつくる作業を進めている。  
(1969/12/2 東京 / 朝刊 p.25)

例 (8) は、1972 年に現れ、広告であり、「ライフケア」という言葉の説明を加えつつ、新しい住まい方を宣伝する表現である。新しいことに注目度を上げるため、カタカナ語が用いられていると思われる。また、ここの「ライフケア」というのは老後の生活のサポートをする環境のことを指していることが分かる。このような例は日本の高齢化社会 (1970 年以降) が始まる前後に出現し、当時まだ、「和語」「漢語」のような従来の日本語ではその意味を十分に表現できず、外国語を借用し、カタカナで表示することになったとも考えられる。例 (9) の「デーケア」もそのような用例である。

- (8) ライフケアとは、生きがいのある老後を、責任をもってお世話する、新しい試みのマンション。アメリカの一流シニア施設〈サンフランシスコ・セコイア〉をモデルに生まれました。55 歳以上の方は、すべて有資格メンバーです。  
(1972/9/14 東京 / 朝刊 p.10)

- (9) 老人ホームに入れないうまま、病弱で寝たきりや一人暮らしを強いられているお年寄りに、通園しながらリハビリテーションや入浴、食事、クラブ活動などをしてもらおうという「在宅老人通園センター」(デーケア・センター) が立川市にお目見えすることになり……  
(1976/6/3 東京 / 朝刊 p.20)

上の老後生活のサポートの面は、例 (10) も (8) (9) と同じように考えられるが、「寝たきりの世話」の「老人ケア」というところから見ると、「ケア」はただの生活のサポートということだけではなく、医療サポートも含まれていると思われる。

- (10) 老人ホームでの豊富な実践から田中他聞氏が「老人ケア」をまとめ、老人看板で有名な村田美智子さん (兵庫日赤指導課長) が寝たきりの世話について細かな指導を行っている。  
(1976/9/18 東京 / 朝刊 p.15)

1977 年には「コミュニティケア」が出現した。ここの「ケア」は例 (11) のように老人の生活のサポートをするだけでなく、家庭や社会から高齢者を孤立させないように、精神面の支えという意味がある。同様に、例 (12) の「デーケア」も精神面を含むサポートであることが分かる。この後、「ケア」は徐々に精神面にも用いられるようになってきた。以上、「ケア」は日常生活や身体的なサポートから、精神的な抽象面にまで使用範囲が拡張してきたことが考察できる。

- (11) 「老人を家庭におく」(スウェーデン、フランス)「コミュニティ・ケア」(イギリス) と、言い方は違うが老人を施設に入れず、町で生活させるというのが、各国に共通した基本的な方針だ。「それも、社会にとけ込んだ姿にしたい」……  
(1977/10/20 東京 / 朝刊 p.3)

(12) 精神科デー・ケアは、第二次大戦後、英国、カナダなどで開発され、わが国では昭和三十七年、国立精神衛生研究所で試験的に始められた。(1978/8/1 東京朝刊 p.5)

続いて、1978年の例(13)(14)は「ケア」が何かのサポートではなく、初めて「手入れ」の意味で使われている。(13)の「スキンケア」は前述した例(5)のような化粧品のシリーズ名ではなく、「肌」の「お手入れ」という意味で用いられている。7年後の(14)も同じ意味である。(14)を確認すると、「あまりなじみがないことば」と書かれており、ここの「フットケア」は恐らく「スキンケア」などからの類推だろう。

(13) それでもスキンケアをおはじめになったからでしょうか[……]肌のお手入れをゆきとどいてると上べだけの美人でないことがわかります。(1978/4/10 夕刊 p.8)

(14) フットケアとは、あまりなじみがないことばだが要するに足の手入れ。  
(1985/10/3 東京 / 朝刊 p.29)

また、1978年に(15)(16)のように「プライマリ・ケア」のような用法も現れている。「ケア」はサポートの意味においては、生活・医療・精神で大きな面で使われてきた。例えば、「アフタケア」のような病後の世話、出来事後のサポート、「ライフケア」のような生活サポートなどに用いられている。しかし、ここは医療面で具体的な「初期ないし主要な診療点」の意味で使用している。こういった用例から、従来の日本語によっては適切に表現できないため、外国語を借用し、カタカナで表示することがあると考えられる。

(15) …「プライマリ・ケア学会」の中の定義……プライマリ (Primary) とは、英語辞典をひくと、①第一の、②初期の、③最も重要なといった意味の形容詞。ケア (Care) とは、心遣い、世話、関心事との意味を持つ言葉だ。(1978/6/7 東京 / 夕刊 p.3)

(16) 衆院の予算委員会で、プライマリー・ケア (初期診療) の重視および政府管掌健保と組合健保と財政調整についての議論がつづいている。(1979/2/9 東京 / 夕刊 p.1)

一方、外来のシステム、医療用語に関する語も下記の例(17)から(19)のようにカタカナで表記するものも多い。(17)の「身体障害者ケアシステム」のような具体的な専門用語、(18)の「メディカル・ケア」の具体的な医療管理、(19)の「ターミナルケア」が終末期の介護、(20)の「ケアワーカー」の具体的な名称を指すため用いられているものもある。

(17) 研究・開発を進めてきた「高齢者・身体障害者ケアシステム」の試作機が明電舎(本社・東京・今井正雄社長)の手で完成した。(1982/8/10 東京 / 朝刊 p.8)

(18) 具体的には「早期発見—早期治療—適切な事後管理とリハビリテーション」と一貫性のあるメディカル・ケア (医療管理) の体制をつくることにある。(1983/2/20 東京 / 朝刊 p.26)

(19) かつて仏教が民衆とともにあった時代にはターミナル・ケア (終末期の介護) やホスピスに相当する施設があった。…無常院、看病堂などと呼ばれるものだ。(1986/10/27/ 朝刊 p.5)

(20) ……新たに「社会福祉士」(ソーシャルワーカー)、「介護福祉士」(ケアワーカー) の二つの資格を設けることが望ましいとの意見書をまとめ、齊藤厚相に提出した。

(1987/3/24 東京 / 朝刊 p.3)

さらに、今回の調査では、上記の例(19)(20)のように括弧で補足の意味として初めて「介護」と結び付いたのが1986年であり、これ以降も同じような使い方が見られたため、このごろから、「ケア」が「介護」の意味領域まで及んできたと考えられる。どれ程影響があったかについては次節の「介護」の意味変化で考察する。

なお、医療面においては、近年までも比較的新しい医療の専門用語はまだ外国語を借用しつつある現象が見られた。しかも、「介護」との関わりが深いものであることがわかる。それは以下の例から説明できる。例(21)～(23)の「ケアプラン」「ケアマネジャー」のように、初期に本文が「漢語」を使い、「カタカナ語」を括弧に入れている。これらの例から「カタカナ語」を用いるのは、日本にない外来物や文化の引用だけではなく、「漢語」や「和語」の長い文書より一つの単語ですべて説明でき、便利などころもあるからだと推測できる。

その後、例(24)(25)のように「ケアプラン」が〈介護サービス計画〉となり、「ケアマネジャー」が〈介護支援専門員〉となるような専門用語は、「カタカナ語」を本文で用い、「漢語」は説明文で使用している。ここの用例から、「ケア」を含む比較的新しい専門用語は日本語として受け入れられつつあり、まだ、完全に定着していないと思われる。

- (21) ……主な内容は、「在宅」では (1) 訪問介護 (ホームヘルプサービス) (2) 訪問看護 (3) リハビリテーション (4) かかりつけ医の療養指導 (5) 福祉用具の貸し出し (6) 介護サービスの計画 (ケアプラン) 作りなど。 (1996/12/13/ 朝刊/p.7)
- (22) 介護保険では、介護支援専門員 (ケアマネジャー) の養成を打ち出しており、こうした動きをにらみながら勉強会や意見交換をしていく。 (1997/8/28/ 朝刊/福岡)
- (23) また、厚労省は制度見直しの一環で、一定以上の所得がある高齢者の利用料を、かかった額の1割から2割に引き上げる案や、介護サービスを受ける際に必要な利用計画 (ケアプラン) の作成を有料化する案を示した。 (2011/11/01/ 朝刊/p.7)
- (24) 施設入所者の居住費などを自己負担化することや、ケアプラン (介護サービス計画) の作成に1割の自己負担を導入することで給付水準を引き下げることにより、医療保険も含めて計約4300億円の給付削減ができるとした。 (2004/12/4 朝刊 p.11)
- (25) 高齢化が進む中、県内では2015年に医療、30年に介護の需要がピークを迎えるとの予測が紹介され、病院と訪問看護やケアマネジャー (介護支援専門員) が連携していく重要性を話し合った。 (2011/11/21 和歌山/朝刊 p.25)

以上の例の出現年代順から見ると、「カタカナ語」は日常生活と関わりの深いものが早く定着したが、それ以外の医療面の専門用語は定着しにくいことが言えるだろう。また、医療面においては「介護」との関わりが深いことも言える。最初に述べたように「ケア」の意味は〈具象物のサポート用品〉を始めとして、〈病後の世話〉や〈一般的なサポート〉や〈出来事後の処理〉〈美容関係〉〈精神面のサポート〉〈老人の世話〉の意味まで広まってきたことが確認できた。

#### 4.3 「介護」の意味的变化について

本節ではグラフ3と4に基づき、「介護」の意味的变化を概観する。また、「介護」は「ケア」の意味の形成にどのような影響があるについても考えたい。

調査範囲から「介護」が確認できたのは1900年、例(26)である。検索であわせて出現した「介抱」も「介護」と関係があると思われるが、ここでは、「介護」を詳しく分析し、「介抱」に関しては、別論にしたいと思う。

1900年以降「介護」の用例は1939年に現れた。下記の(27)がその例であり、「介護用品」で使われている。しかし、続く例は約30年後1971年の例である。両方とも長い間使用されていない。その理由は残念ながら今までの調査では不明である。

(26) 知事の介護 [……] 自ら老婆を介護し、應急の施術をなす見る人其機敏の働きに嘆賞せざるはなし。 (1900/2/7 東京 / 朝刊 p.3)

(27) 全部に對し傷疾病の種類程度に應じた介護用具を支給することになり五日地方長宛連絡した。 (1939/7/6 東京 / 朝刊 p.11)

グラフ 3 を見ると、1971 年から出現した「介護」はそれ以来、継続的に使われるようになってきた。下記の例 (28) がそれである。以後、安定して使われてきたのは恐らく 1970 年頃から日本が高齢化社会と認められ、高齢者に対する介護福祉の問題が公的な社会問題として取り上げられているからであろう。この点は 1976 年まで殆どの例が (28) のように、「お年寄り対策」の一つ「介護員」、(29) の「老人の世話をする人」への「介護手当」であることから考えられる。

(28) お年寄り対策の一つとして、新年度から文京区は「話し合い員」、また杉並区は「介護員」の制度をそれぞれスタートさせる。 (1971/3/2 朝刊 /p.20)

(29) 介護手当。寝たきりの老人の入浴の世話をする人に払う。月、二千元。四月から実施のつもりだ。 (1973/2/27 朝刊 /p.5)

その後も多くの例は「患者」「障碍」「老人」などのような生活に不便な人々へのサポートをする意味である。以下の例 (29)～(31) がその例である。

(30) 夫の介護のために仕事をやめた。妻は、夫の神経をいらだたせない気配り、過労にならない気配りをしながら、入浴や洗面の手助けをしており、「もっと時間がほしい」が六割を占めた。 (1976/6/9 朝刊 p.3)

(31) 港区は、心身障碍者の家族らが病気などで一時的に障害者の面倒を見られなくなった際、介護人を派遣して障害者の身の回りの世話をにあたってもらう「障害者介護人派遣制度」を、十月からスタートさせる。 (1976/9/26 朝刊 p.20)

(32) 家族と同居している六十五歳以上の寝たきり老人を対象に行った老人介護実態調査の中間報告がこのほどまとまった。 (1977/9/15 朝刊 p.3)

続いて、7年後に「介護保険」という語が表れてきた。文脈を確認すると、ここの「介護保険」は高齢者に対する社会制度の一つとして重視されてきたと思われる。

(33) アメリカン・ファミリー生命保険会社 (安達晋一郎社長) は十六日、来年一月一日から「痴ほう介護保険」を発売すると発表した。最近社会問題化している“ボケ老人”の増加に対応し、介護をする家庭の負担を、介護料の給付などで軽減しようとするもので、この種保険はわが国では初めて。 (1984/11/17 朝刊 p.8)

さらに、ほぼ4年後、「介護」は高齢者の生活のサポートという意味だけに留まらず、医療方面、専門知識にも用いるようになってきた。下記の例 (34)～(36) がそれである。ただ、その対象者はやはり、「高齢者」「患者」であることが確認できる。

(34) 連続講座では「性について」「高齢者の医療介護」「ストレスがもたらすもの」などをテーマに、専門医を招き、話し合ってきた。 (1988/9/4 朝刊 / 埼玉)

(35) 介護技術講座「家庭で役立つ介護知識と技術」9日から7月いっぱい毎週火曜日と木曜日の午前10時～午後4時半。 (1988/5/29 朝刊 p.22)

(36) 患者に限りある時間を本人の望むように過ごしてもらうため、治療は最小限にとどめ、日常生活を援助するための「介護」を中心にするのがホスピスの基本的な考え。 [……] 当日は介護医療の中心になっている看護婦やボランティア活動を続けている人も参加する予定。

(1989/11/1 朝刊 / 群馬)

以上、「介護」についての分析をまとめると、「介護」は初期から生活が不自由な人々に対する世話という意味で使われ、対象者が「高齢者」「患者」など生活のサポートが必要である人々を中心に、次第に制度、医療、知識まで使用領域が拡張されてきたことが明らかになった。

#### 4.4 まとめ

ここまで、「ケア」と「介護」の意味変化を考察してきた。全体をまとめると、「ケア」は外国語の借用から徐々に日本語として定着し、意味範囲も「事後処理」から「生活サポート」「高齢者の世話」「精神のサポート」にまで拡張してきた。また、医療面においては「介護」と近い意味も持つようになってきたことが確認できた。それに対して「介護」は最初から老人や障害者などへの生活の世話という意味で使われ、次第にそれを中心とする制度、医療、知識などの専門用語にも表れてきた。こういった変化から見ると、「ケア」は外来語であり、原語の意味<sup>6)</sup>が段階的に日本語母語話者に認知され、次第に現在の意味フレーム「世話、生活・精神・医療面のサポート、体の手入れ、……」が形成されたのに比べ、「介護」は最初から高齢者、患者、動き不便の人々に対する日常のサポートから医療サポートまで広まってきたという意味で用いられ、現在まで大きな変化はしていないというように解釈できる。しかし、前稿でまとめた今日的な意味フレームである図1のような違いはまだすべて現れていない。

### 5. 『分類語彙表』による「ケア」と「介護」の意味変化の考察

ここでは、「ケア」と「介護」の意味を画定し、あわせて年代的な変化も考察する。この考察は田島毓堂(1999)の語彙に関する「意味分野別構造分析」の方法を用いる。それは「意味をカテゴリー化した上で、そこに語を当てはめ、その個々の語にコードを与え、それによって語彙を分析する方法」田島氏である。

以下、ここでは、一つの文脈の中で「ケア」と「介護」と関わりの深い語である〈直前直後共起語〉と〈文中共起語〉を、田島氏の『分類語彙表』の意味分類コードを与える手法で、両語の意味分布を概観する。以下、両語のそれぞれの〈直前直後共起語〉〈文中共起語〉を意味フレーム分析の手がかりとして用いる。すなわち、対象語の周囲にある語とその語の意味を分析することによって、対象語の使用範囲、意味などが分かるはずである。

表1・2は1987年までの毎年(但し、1984年は短縮版と完全版を表示している)と1994年、2000年<sup>7)</sup>の各年の使用語で作成した意味分類表である。また、平均的な使用と思われる年を2つ取り上げる。それぞれ1994年と2000年である。両年の全体の使用例が多いため、季節や月毎などの報道の偏りを避けるため、『朝日新聞』の検索上の出現順で各月に50例ずつ選び、全部で600例を抽出し、分析対象とした。この抽出法で、季節や記事別の偏りは避けられると思う。

全体的に見ると、『分類語彙表』の意味別からして、「分類」項「ケア」は〈人間活動—精神及び行為〉から〈人間活動の主体〉、〈抽象的な関係〉へと用例の分布が徐々に広まり、1984年の完全版に変わってからやはりこの3分野で使用されている。一方、「介護」はほぼ集中的に〈人間活動の主体〉、〈人間活動—精神及び行為〉の2分野に出現している。1984年の完全版に移ると、「介護」は

その二つの分野以外に、〈抽象的な関係〉欄も用例が多くなった。この〈抽象的な関係〉の内実を確認したところ「介護サービス」や「介護付き」「要介護度」などのような具体的な制度の規定に関する専門用語である。詳しくは以下、「ケア」と「介護」に分けてその意味領域の変化を分析する。

## 5.1 『語彙分類表』による「ケア」の意味分野の変化についての考察

### 短縮版

まず、短縮版に基づき、初期の「ケア」が出現した分野について考察してみよう。表1においては、「共起語」をキーにして意味別「分類」欄、その下位の「項目」項を探ると「ケア」の初出例は〈生産物及び用具〉欄の中の〈物品〉項目で「ケア小包み」、その後〈人間活動－精神及び行為〉欄の〈事業〉項で「アフタケア」が出現している。こういった「小包み」「アフタ」のような共起語の出現状況を見ると、「ケア」は日常生活の具体的な用品から外国から移入のシステムに関する専門用語にまで使われている。続いて、1964年に別の分野〈自然物及び自然現象〉欄の内の〈身体〉項で「スキン」が現れてきた。それ以降1969年から1975年まで主に〈人間活動精神及び行為〉の分野で使用されている。

なお、1976年から徐々に使用分野が広まり、上述の分野以外の〈人間活動の主体〉欄に進出しつつある。この欄に現れたのは、その下位の〈人間〉項に「老人」、翌年に〈社会〉項に「コミュニティ」、〈機関〉項に「センター」がある。以上の項目にまで使われるようになったのは、「ケア」が徐々に社会問題として認識されるようになってきたためと考えられる。

続いて1978年から〈抽象的な関係〉欄にも例が現われた。それはこの欄の下位〈類〉の項に出た「プライマリ」である。こうした変化の中で1980年に〈生産物および用具〉分野を除く、すべての分野に用例が現れてきた。それ以降も使用分野の分布が1980年と同様であり、主に表1の上の欄の〈抽象的な関係〉〈人間活動および精神〉〈人間活動の主体〉で用いられている。こういった使用範囲は現在まで継続しつつある。

以上、短縮版の分布の情報である。短縮版であるため、全ての情報が表されているとは言えないが、凡その傾向は現れていると思われる。

### 完全版

完全版においても主に上記の三つの意味「分類」欄を中心に分布していることが見られる。完全版であるため、短縮版より用例が多く現れているという点を考慮しながら以下の分析をしたい。

表1の完全版部分を見ると、全体に使用例数が多く、広く分布している。但し「分類」項の〈生産物および用具〉の使用が少なく、〈抽象的な関係〉〈人間活動の主体〉〈人間活動精神および行為〉の分野に集中的に現れている。各項目の中に使用例が多いものを列挙すると、以下の通りである。

1984年 〈人間活動精神および行為〉〈事業〉の項目全部7例あり、その中の代表例は「アフタ」6例である（以下すべて〈事業〉7「アフタ」6のように表示する）。

1985年 〈抽象的な関係〉〈類〉11「プライマリー」11、〈生活〉12「デイ」12、〈事業〉12「アフタ」12

1986年 〈抽象的な関係〉〈類〉10「付き」10、〈空間〉13「地域」13、〈待遇〉13「デイ」13、〈事業〉17「アフタ」17

1987年 〈抽象的な関係〉〈類〉19「付き」19、〈待遇〉9「ケア」9、〈事業〉21「アフタ」21

上記の用例と表1を合わせて見ると、「ケア」の分布領域が徐々に広まっているが、その中で〈人間活動—精神および行為〉の分布が中心となったことが確認できる。即ち、「ケア」は生活のサポートより精神面のサポートでよく使用されていると考えられる。

### 1994年と2000年

最後にグラフ1の量的な変化の中で、上り初め頃の1994年と6000例を超えた2000年の分布状況を検討してみよう。表1でこれらの年を見ると、「ケア」の意味分野が1984頃よりもっと広まり、〈生産物および用具〉と〈自然物および自然現象〉の分野にも多く現れている。その下位の「項目」で分布数が大きく違うのは、新しく出現した分野として1994年に主に〈待遇〉173例、〈事業〉69例である。〈待遇〉面においては代表的な使用例は「在宅」81例、「デイ」81例であり、〈事業〉項は「ターミナル」41例であり、「アフタ」18例である。それに対して2000年になると、〈待遇〉と〈事業〉の用例が少なくそれぞれ31例と5例であるものの、〈成員〉と〈心〉は多く現れ、各々135例（「マネジャー」126）と204例（「プラン」121「心」70）である。

以上の分布の変化から見ると次のようなことが言える。①1994年にまだ、以前の「ケア」の特性が持ち続けられ、大きな変動はない。②2000年に現れる使用例の重点が変わって来た。この変化は、まず、1995年の阪神大震災の影響で、「ケア」は精神的な、心的なサポートという使い方が急激に増加したからである。例えば、用例中にも災害の被害者への「心のケア」という言葉が多く使用されているのが見られる。また、日本は高齢社会になりつつあることにつれ、高齢者への生活サポートの問題も注目され、それに関する専門用語も増えてきた。例としては「ケアマネジャー」や「ケアプラン」などのような専門用語がある。

### 5.2 『語彙分類表』による「介護」の意味分野の変化についての考察

表2を見ると、「介護」が主に〈人間活動の主体〉と〈人間活動—精神および行為〉面に集中的に分布していることが分かる。表1の「ケア」のように徐々に広まっていくのではなく、両分野同時に進行している。

#### 短縮版

短縮版では1939年に1例あり、それは〈生産物および用具〉欄の〈道具〉項で「用具」の例である（前節の例(26)のように負傷の人に使う用具を指している）。その後、約30年後に再度出現し、同じ分野〈人間活動の主体〉の〈成員〉項に「介護員」が現れ、それは年寄りへのサポートをする人を指している。以後、1980年までもすべての使用例が〈人間活動の主体〉欄と〈人間活動—精神および行為〉欄に現れている。主に〈人間〉項の「人」「障害者」「老人」や〈経済〉項の「手当」「料」などのような例である。これらを見ると、「介護」は主に生活に関わるサポートの面で使われていると思われる。

#### 完全版

完全版に移り、1984年以降1987年まで、「介護」の各々の項目の用例数を確認すると、やはり〈人間活動の主体〉欄〈人間活動—精神および行為〉欄に集中していることがわかる。

さらに詳細に見ると、一目瞭然、「介護」は対象者主に高齢者への生活サポートを中心に使用され

表1 「ケア」の語彙類

分類	項目	体の類																				相の類											
		短縮版←→完全版																															
年次		1948	1953	1956	1957	1963	1964	1966	1967	1968	1969	1970	1972	1973	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1984	1985	1986	1987	1994	2000	1994	2000	
抽象的な関係	事柄																	2	4	1				2	1	1	10	19	17	5		1	
	類																																
	存在																						1										
	様相																										2		5	21	18	1	3
	力																							1									
	作用																																
	時間																																
人間活動の主体	空間																																
	形																																
	量																			1										8	10	1	1
	人間																1									1	3	2	5	20	11		
	家族																																
	仲間																																
	人物																																
	成員																																
	公私																																
	社会																																
機関																																	
人間活動一精および行為	心																																
	言語																																
	芸術																																
	生活																																
	行為																																
	交わり																																
	待遇																																
生産および用具	経済																																
	事業																																
	物品	1																															
	資材																																
	衣料																																
	食料																																
	住居																																
自然および自然現象	道具																																
	機械																																
土地																																	
自然物	物質																																
身体	自然																																
生命	身体																																
その他の類	生命																																
合計		1	1	1	1	1	3	1	4	2	1	3	4	2	4	6	8	4	4	5	3	5	5	6	27	78	97	98	591	579	9	21	

表2 「介護」の語彙類

分類	項目	体の類																				相の類									
		短縮版←→完全版																													
年次		以前	1939	1971	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1984	1985	1986	1987	1994	2000	1984	1985	1986	1987	1994	2000			
抽象的な関係	事柄																														
	類																														
	存在																														
	様相																														
	力																														
	作用																														
	時間																														
人間活動の主体	空間																														
	形																														
	量																														
	人間																														
	家族																														
	仲間																														
	人物																														
	成員																														
	公私																														
	社会																														
機関																															
人間活動一精および行為	心																														
	言語																														
	芸術																														
	生活																														
	行為																														
	交わり																														
	待遇																														
生産および用具	経済																														
	事業																														
	物品	877																													
	資材																														
	衣料																														
	食料																														
	住居																														
自然および自然現象	道具																														
	機械																														
土地																															
自然物	自然																														
身体	物質																														
生命	植物																														
その他の類	動物																														
合計		877	1	1	4	2	6	2	5	3	7	6	8	5	9	7	39	2150	2124	2148	598	598	1	2	5	1	2	2			

ていることがわかる。〈人間〉項は主に「お年寄り」「老人」、〈家族〉「親」「夫」であり、〈心〉項は「技術」「知識」「疲れ」、〈経済〉「手当」「費」のような例である。以上のような使用例（代表例）が他より多く、出現している。

### 1994年と2000年

続いて完全版の平均的な使用状況を示すと思われる、1994年と2000年の分布状況を見てみよう。下記はそれぞれの詳細例である。1994年に多く使われているのは〈人間〉〈心〉〈待遇〉である。

〈人間活動の主体〉〈人間〉157例その中に多数を示しているのは「お年寄り」50例「高齢者」58例（以下〈人間〉157「お年寄り」50「高齢者」58のように記載する）、〈家族〉36「親」17、〈成員〉46「職員」27

〈人間活動—精神および行為〉〈心〉38「介護実習/研修/制度」21、〈生活〉36「休暇/休業」14「福祉」7〈待遇〉99「在宅」76ある。

この中にも〈人間〉（157例）と〈待遇〉（99例）の使用例が他よりより一層多い。一方、2000年では以下の通りである。

〈抽象的な関係〉〈量〉68「度」67

〈人間活動の主体〉〈人間〉「お年寄り/老人/高齢者」21

〈人間活動—精神および行為〉〈交わり〉60「サービス」27「訪問」18

〈人間活動—精神および行為〉〈経済〉288「保険」262ある。

1994年と2000年の意味分野の分布と変化の状況をまとめると、1994年「介護」は主に高齢者の生活サポートとこれに関わる様々な選択プランが主な使い方であるが、2000年には「介護」が既に社会福祉問題として取り入れられ、「介護保険」のような専門用語が増えることが、全体の使用度の増加の理由であると考えられる。

ここまで、「ケア」と「介護」それぞれの意味分布を考察してきた。〈人間活動主体〉〈人間活動—精神および行為〉欄は相互に影響しながら存在していることがわかる。〈抽象的な関係〉においては〈ケア〉が多く出現していることが明らかである。

## 6. まとめ

以上、「ケア」と「介護」の分析をまとめると、以下の図2で表現できる。ただ、この図はすべての意味フレームが現れるというわけではなく、語の意味は時間、使用する人の環境、経験などの変化によって変わるものであるから、ここでは、『朝日新聞』に基づいた調査の結果である。

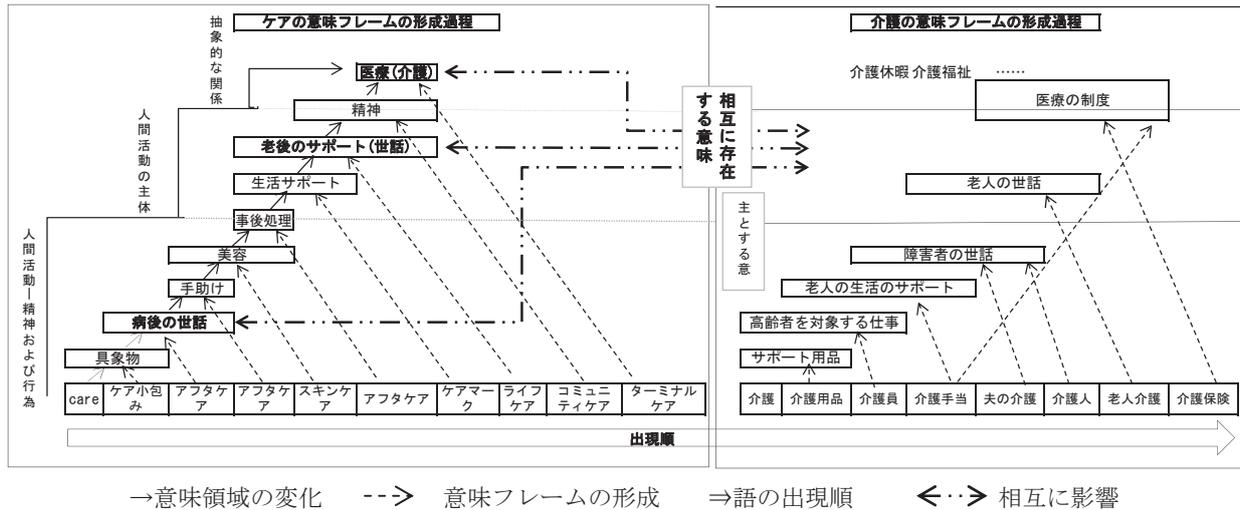


図2 「ケア」と「介護」の意味フレーム

①図2のように「ケア」は生活のサポートの具象物から、病後の世話、出来事の事後処理まで広まった。その後、1970年から日本が高齢化社会に入ることに関わり、老後問題や年寄りへのサポートや生活の環境づくりなど様々な問題が現れてきた。それに対して当時経験が不十分な日本が欧米のシステムを移入し、これに関する専門用語も増加してきた。こういった状況で「ケア」の使用量、意味の拡大も生じた。例えば、「老人ケア」「ターミナルケア」などのような語によって表される面である。一方、「介護」は初めから動きが不自由な人々へのサポートという意味で用いられている。1970年からは高齢者の社会問題に関する社会福祉、法律が生まれ、これに関わる新しい用語が現れてきた。例えば「介護手当、介護人、介護支援者」などのような語である。

②「ケア」と「介護」は両方とも人間活動の分野と関わりが深い。「ケア」は狭い意味から徐々に、〈人間活動—精神および行為〉から〈人間活動の主体〉、〈抽象的な関係〉まで段階的拡張してきたのに対して〈介護〉は〈人間活動の主体〉から〈人間活動—精神および行為〉の分野で同時に進んでいる。

③「ケア」と「介護」は人（高齢者、患者）の生活サポート、特に医療面においては互いに影響し合っていることもわかる。

## 7. 今後の課題

今回の調査は新聞に基づき、「ケア」と「介護」の意味変化を考察してきた。凡その概観は把握できたと思う。詳細のところはまだ不十分であり、深めることが必要である。例えば、1939年以前の「介護」と「介抱」の使い分けや1971年までの三十年の空白はなぜなのか、検討する余地がある。その上、「ケア」と「介護」だけではなく、「介抱」「世話」「手入れ」などのような周囲的な類義語との関連、変化などの考察も欠かせない。

大きな課題としては、もっと多くのカタカナ語を含む類義語の調査を続け、全体的な関係性の有無を検討することがある。

## 注

- 1) 『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』では、2001 年～2005 年に、国立国語研究所が 200 万字分の本文を調査対象とし、分野と発行部数を考慮して選出した 1994 年の月刊雑誌 70 誌において、どのような語彙がどのくらい使用されるのかという実態を計量的に明らかにすることにより、現代日本の語彙の実態の一面を把握することを目的とした記述を行った。
- 2) 今回使用したデータは短縮版（1879 年～1984 年 8 月）と完全版（1984 年 8 月～）の二つに分けられているので、調査分析も 2 つに分けて行う。短縮版は完全版よりデータの量が少ないが、意味の変化状況を調べるのに大きな影響はないと思われる。
- 3) カテゴリー化した意味の一覧である『分類語彙表』（2004 年）は意味分野別語彙構造分析法における基準として適切なものである。
- 4) 原文を確認したところ 1879 年と 1884 年の間に 4 例があり、すべて「介抱」である。1900 年には「介護」1 例を見出した。その後 1939 年以前は「介護事業」という語ばかりであり、内容を確認すると、介護事業という語が直接に使われておらず、「慈善、保護、療養、教養」などの報道であった。1939 年に「介護」が、1940 年「介抱」が一例ずつあった。その後 30 年ほど「介護」の用例が見出せない。1970 年以降調査上と内容を一致した。
- 5) 初出例はデータ上は 1941 年であったが、紙面で点検すると、その例は見つけられなかったため、本論の初出例はその次の 1948 年の例とした。
- 6) care ① helping sb ② keeping sth ③ in good condition ④ carefulness ⑤ take care of sb/sth 『ロングマン英英辞典』第 5 版 桐原書店 2010 年
- 7) 調査年の選択は、使用頻度が増加している過程の中に、特別な出来事がある年を避け、それに直接の影響が薄い年を選択することにした。例えば、1995 年阪神大震災の影響により、1995 年と 1996 年に「心のケア」の使用頻度が急増し、全体の使用頻度にも影響している。したがってそれを避けるため、その前年、1994 年のデータを用いた。2000 年のデータの利用は 1998 年から介護は社会福祉として重視され、その年が「介護支援者」「ケアマネジャー」などの使用頻度も急に増え、全体的な使用頻度に影響している。その事情を避けるためこの年を使用することにした。

## 参考文献

- 金愛蘭（2006）「外来語「トラブル」の基本語化—20 世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』第 2 巻 2 号
- 陣内正敬他（2012）『外来語研究の新展開』おうふう
- 田島毓堂（1999）『比較語彙研究序説』笠間書院
- 田島毓堂（2000）「語彙研究法としての意味分野別構造分析法概説」『比較語彙研究の試み』5, 名古屋大学大学院国際開発研究科
- 松崎由貴（2013）「関連性理論による外来語の分析」『言語 文化 社会』(11), 29-42, 学習院大学
- 松本曜（2003）『認知意味論』修学館
- 彭飛（2003）『外国人を悩ませる日本語から見た日本語の特徴』凡人社
- 陳暁静（2013）「類義語としてのカタカナ語・漢語の意味的相違—「ケア」と「介護」の意味上の相違について—」『立命館文学』第 637 号, 1-13

## 参考資料

- 『ロングマン英英辞典』第 5 版 桐原書店
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表』
- 『朝日新聞』 聞蔵Ⅱ

(本学大学院博士後期課程)